図書館奇譚

須条那智

放課後には雨が降る

やばいっ、すっかり遅くなっちゃった。
ぱたぱたと廊下を走っていた私は、突き当たりの図書室の扉を開けた。
「たっだいまぁ」
できる限りにこやかに言った私を、雑巾片手になにやらあたふたやっていたお留守番の市岡さんが、血相を変えて振り返った。
「先輩っ！」
「ああ、ごめんね、遅くなって」
「雨漏りですっ！」
「あまもりぃ？」
思わず外を見る。
台風の影響なのか、しとしとと雨が降っている。でも・・・雨漏りなんて、そんな馬鹿な。
確かに、うちの高校は古い。でも、図書室は鉄筋コンクリートの校舎の一階にある。そんなとこに漏ってくるような根性が、あの細い雨にあるのかしら？
思わず考え込む私の後ろから、一緒に委員会から戻ってきた副委員長の舛田くんが、のほほんと言った。
「器用な雨だ」
そうよねぇ、と頷きかけて、はたと現実に戻る。んなこと言ってる場合じゃないっ!
雨は、窓枠づたいにポタポタどころかザーザーと流れ落ちて本棚を濡らしていく。
「どうします、委員長？」
「舛田、ありったけのバケツと雑巾持ってきて。そこっ、そこで本読んでるお兄さん。悪いけど、窓際の本棚の中身、全部引っ張り出して机の上に置いて」
言いながら、本を引っ張り出す。冗談じゃない。なんなんだ、これは。
バタバタとバケツと雑巾を抱えて走ってきた舛田くんは、手際よく雨漏り現場にバケツを並べ始めた。すぐにピッチャンパッチャンと音が響く。ところが・・・。
「委員長、足りません！」
「足らない！？」
「先輩っ、これ、どうでしょうか？」
雑巾片手に市岡さんが嬉々として差し出したものは・・・・。
「ゴミ箱？」
「はい」
はいって、あのね・・・ま、いいか。この際だ。
「舛田のとこに持って行ってあげて。それから悪いけど、上の美術室に行ってみて」
「美術室ですか？」
「うん、美術室。あそこ、窓際に水道有るから」
そう。図書室の真上は美術室。こんな雨漏り絶対おかしい。よしんば、これがもし本当の雨漏

りだったとしても、上の美術室の方が、絶対被害があろうというもの。

図書室が幾分落ち着き、すぐにいっぱいになるバケツを、ため息をつきつつ取り替えている頃、血相を変えた市岡さんが戻ってきた。
「先輩っ、美術室が海です」
・・・・・頭、痛い。
「床から水が溢れて、ほうきで水をはき出しているんですけど、人もほうきも足らないみたいです。だから、図書室のほうき、持って行きますね。ね？先輩？死なないでくださいよ」
そう言って市岡さんは、掃除用具入れからほうきを取り出して抱えた。
「行ってきます」
どうぞどうぞ・・・・あ。
「まって、私も行くわ。舛田、あとお願いね」
「はい」こっくりうなずく舛田くん。
と、その時どこに行っていたのか、図書室の主、司書の岡崎先生がのっそりと戻ってきて、窓際にずらっと並べられたバケツとゴミ箱に目を丸くする。
「委員長、どうした」
「美術室が海で、図書室が雨漏りなので、美術室の方を手伝ってきます」
「またか」
・・・・我ながら、なんという返答の仕方。これで状況がわかるとは思えない・・・・ん？またか？
岡崎先生は苦虫をつぶしたような顔で、
「行かんでいいぞ」と言った。
「あのぉ・・・一応美術部員ですから。それより、またかって、今おっしゃいました？」
聞くのが怖い。そう思いつつ、おそるおそる尋ねると、実に忌々しげに、世にも恐ろしいことを宣った。
「あのバカが、何度も言ってるのに、水道のゴミを溜めたままにするから、二年に一度、水道管がぶっ壊れるんだ」
「はぁぁ？」
なんとま・・・・・もう、笑うしかないね。

美術室は、ひどいものだった。広い広い美術室の床すべてに、５、６ｃｍもの水が溜まっていて、美術部員とのこのこ遊びに来ていたＯＢ4人組みが右往左往しながら水をほうきで掃き出している。でも床からしみだしている水はだんだんと勢いを増して、ほとんど湧き水と化しているようだった。
これは・・・当分帰れないな。とにかく行動有るのみ。

しばらくして教育実習の先生が、ようやく水道屋さんを連れてきてくれて、水が止まった。やはり、水道管の破裂が原因。でも、水は止まったけど・・・・ねえ。
美術室はぐちゃぐちゃで、雑巾は泥と木くずでどろどろ。いかに普段の掃除がちゃんとされていないかがよくわかる。
『あのバカ』と岡崎先生が称した偉大なる美術室の主、小笠原先生は授業がないからと、三時過ぎにはもう、ご帰宅さっていたようだ。
・・・おっさんの阿呆。なんで、壊れたのが腐海、もとい美術準備室じゃなかったのかしら。
あまりの理不尽さに拳を握りしめる私の後ろで、やけに楽しげな声が上がる。

「お、ここにも水が溜まってるぞ」
「ほぉ、きれいになりまんな」
「たまにはいいんでないの？」

くぉの、お気楽ＯＢどもがぁ！

「ところで、下に水が漏れたって？」
水道屋さん、フト首をかしげる。
「え？あ、はい」
「ふうん。ま、ここはいいとして、下の部屋は水が止まるのは明日ですね」
「は？」
あのぉ・・・水道屋さん。なんと言うことをおっしゃるのです。
「どうしてですか？」
「どうしてって、下とここ、天井・・・まぁ、ここでいう床の厚みって相当のものだし」
ま、それはそうでしょう。
「その厚み一杯に水が浸透したから下に漏れたんだろうし、ここも床上浸水しているわけですよ」
ふむふむ。
「その厚み分の水が全部出るわけだからね。やっぱり、明日ぐらいになると思いますよ」
大変だ・・・・のほほん、と思う。今頃、舛田一人でどうしてるだろう。バケツとゴミ箱あわせて１１個分。あの勢いで水が落ちているなら、水捨てだけでもてんやわんやだうな・・・・。
溜息ひとつついて、
「市岡さん、図書室に戻ろうか」
のほほん頭のまま図書室に戻った私たちを待ち受けていたのは、バケツの水どころじゃなかった。
「委員長っ！」
目一杯、悲愴な顔で舛田くんが言う。
「何かあったの？」

「あれ、見てください」
舛田くんの指さす向こう側で、窓際から脱出させたはずの本が濡れている。
いやぁな予感。
恐る恐る天井を見上げて・・・・あーあ。
水は今や、柔らかい漆喰の天井仕切部分をつたって、閲覧室の上まで拡がっていた。
いつの間にか、外の雨はやんでいる。時計が六時を告げる。
帰りたいなぁ・・・。
はぁ。溜息ばかりが出るものの、濡れた本をこのままにはしておけない。
「とにかく、本を移動しよう。舛田、濡れた本は別にして、市岡さんは雑巾持ってきて机拭いてね。ところで先生？それはなんですか？」
またどこかに行っていたらしい岡崎先生が、抱えていた物を差し出す。
「何って、アイロン」
そんなことは、見ればわかる。問題はどうしてそれをいくつも持ってきたか、だ。
「本をこれで乾かす。自然乾燥だとシミになるからな。早めにぱっと乾かすのが一番だ」
・・・・そうでしょう。ええ、ええ、その通りです。年鑑や卒業生の文集、文庫本。数えたくない数の本が濡れてるんですものね。そうせざるを得ないでしょう。

「委員長ぉぉぉ」
舛田くんが情けない声を出す。
「俺、もうやだ」
「・・・・言うな」
私だって嫌です。
「明日から早く登校しようね、舛田副委員長」
「・・・・・・・」

かくして。
私たちは、本にアイロンをかけるという単純にして、かつ、ばかばかしい作業に丸三日を費やすのであった。